

# 校外実習でアクティブ・ラーニングを実践する ——事前学習での RESAS (地域経済分析システム) の活用——

頼 俊輔

本報告は、新学習指導要領のもとで学んだ高校生が2025年度から大学へ入学することを見据え、学部の教育プログラムである校外実習をどのように充実化していくか、事例をもとに情報共有することを目的とする。

## 1. 新しい学習指導要領と「探究」

2022年度から開始される高校の学習指導要領の改定において重視されているのが「探究」である。具体的な科目として、「古典探究」「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」「理数探究」「総合的な探究の時間」が設けられたほか、「歴史総合」「地理総合」においても「探究」的な学びが重視され、学校教育は、従前の記憶中心の学びから、自ら問いを立て、様々な角度から問いを深めていく学習へ移り始めている。「探究」は、アクティブ・ラーニングによって追求される。アクティブ・ラーニングは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」から構成され、それぞれ、自分で問いを立てる、グループ内の議論や異なる視点の受容、様々な知識を結びつけて考える、ことなどを目的としている（詳細は文部科学省のウェブサイトを参照されたい）。

こうした学校教育の変化を受けて大学教育はどうあるべきか、筆者が明治学院大学国際学部において行っている2つの教育活動について反省的に振り返ってみる。1つ目は、校外実習（ゼミ単位で国内・海外を訪問する研修プログラム）であるが、筆者は2013年～2018年にかけてインドネシア・東ティモール、島根への校外実習を実施した。いずれも10日間から14日間の行程で、参加学生には、途上国・過疎地の様子を肌で知り、互いの知的な交流をする貴重な機会であったと感じているが、事前学習が質・量とも十分にできないという課題を抱えている。実習にあたっては、訪問先の地理、現地の言葉、地域の課題などを下調べして、状況を把握しておくことが重要であるが、特に途上国を訪問する場合、情報自体が少なく、情報があったとしても現地語で書かれたものがほとんどであり、学生にとってはかなりハードルの高い事前学習になってしまう。結果、ゼミの教員が選定した訪問先を順調に訪問し、予定を消化していく、という教員主導のゼミ旅行の側面が強まることになりがちである。もう1つは、卒業論文の課題であり、指導を通じて、学生が論文を書くうえで最も重要な「問い・仮説を立てる」ことに苦労している様子が伺える。加えて、文系学部の学生に顕著であると思われるが、統計を用いた実証分析にも大きな課題がある。

学習指導要領の改定、校外実習や卒業論文の抱えている課題、を踏まえ、校外実習のアクティブ・ラーニング化を実践してみることにした。以下、実習の事前学習の様子、実践を通じて見えてきた課題について記す。

## 2. 2021年度校外実習@郡上市の概要

2021年度の校外実習は岐阜県郡上市への訪問とした。郡上市の北西に位置する白山の麓にある石徹白区自然エネルギーを活用した地域づくりの様子に学びたい、ということが実習地選定のきっかけである。その関連で情報収集をするなかで、中心市街地である八幡町でまちづくりの取り組みが行われていること、国際学部の卒業生が何名か定住していることが分かった。また、郡上市は小規模都市（4万人）であるが、産業構造が多様（製造業、観光業、農林業など）であり、地域経済の動態を把握する上でも格好の地域であると判断した。実習の主目的は郡上市の経済状況の把握とし、自然エネルギーやまちづくりの視察も、その地域経済の分析の中に取り込んで行うこととした。

実習は、夏休みに入ってからすぐ7月30日から8月7日の9日間とし、参加予定学生は16名となった。16名の学生は、人口・観光・製造業・農林業グループに4名ずつに振り分け、各グループが事前学習で立てた問いに対応するヒアリング先へ訪問（1日に2件くらい）することにした。実習の事前学習は、大きく分けて2種類あり、ひとつはテキストを用いた地域経済の学習（4月から6月：『国際化時代の地域経済学』有斐閣）であり、地域経済の現状・歴史について、「経済のグローバル化」「政府の国土政策」「地方自治と地域づくり」の観点から学習した。もうひとつは、RESAS（地域経済分析システム：詳細は内閣府のRESASのページを参照）を使ったグループごとの学習であり、データを用いて郡上市の経済について調べ、「問い」を立てることを目的としている。

## 3. RESASを使った事前学習

実習の事前学習としてRESASを使うことのメリットは、「様々なビッグデータ（人口・観光・産業など）がワンストップで利用できる」、「視覚効果（グラフやモデル図で直感的に理解しやすい）」「周辺自治体と同規模の自治体とのデータの連動（比較が容易）」「操作が簡単」などである。操作が簡単であるとはいえ、データを扱うことに慣れていない学生にとっては、何をどこから始めればよいかかわからないので、RESASを使うにあたって2週に分けてゼミの時間を使い、関東経済産業局によるRESASの使い方講座を実施した。関東経済産業局には、郡上市の4つのテーマに即した分析の仕方について実例を示しながら教えていただいた。

使い方講座の後、各グループに分かれて、分析作業が始まった。紙幅が限られており、製造業グループの分析のみを紹介する。図1と図2は、製造業グループが作成した資料である。図1は、郡上市の産業別特化係数を示しており、それぞれの産業分野の特化係数の全自治体平均の水準である1を大きく超えている産業分野は、「木材・木製品製造業」「家具・装備品製造業」であり、郡上市が両分野に特化していることが伺える。製造業グループは、これをもとに、郡上市の木材・木材関連産業について、とくに両部門の付加価値額に着目して分析を進めた。図2は、「経済センサス—活動調査」のデータを用い、郡上市と、隣接する高山市の林業、林業・装備品製造業の付加価値額の県内・全国順位を示している。これによると、家具・装備品製造業において、両自治体の違いが顕著であり、高山市は木材加工業の付加価値額が全国的に高い一方で、郡上市はかなり劣後している。

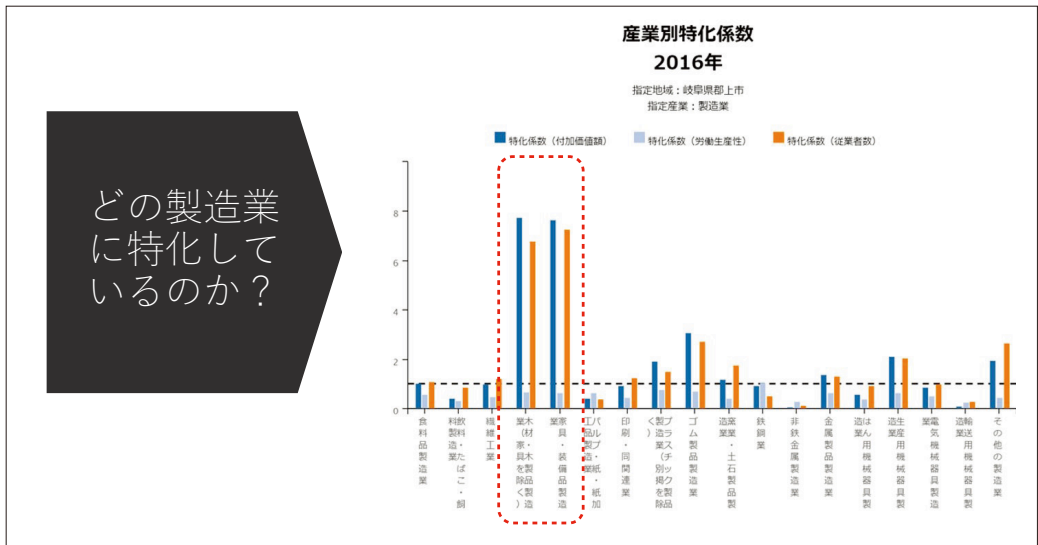


図1 製造業グループ資料 その1

## 付加価値額 (2006)

### 郡上市

林業	県内 2位	全国 11位	
家具・装備品製造業	県内 9位	全国 101位	

### 岐阜県内 高山市

林業	県内 1位	全国 8位
家具・装備品製造業	県内 1位	全国 24位

出典：総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」再編加工

図2 製造業グループ資料 その2

この情報をもとに、製造業グループは、郡上市は木材製造業・家具製造業において発展の余地があり、木材加工分野への振興により、地域経済全体への波及効果が見込まれるのではないかと、という問いを立てることになった。この問いをもとに、木材の伐採・出材から製材・乾燥・加工・プレカットまで手掛ける企業をインターネット上でいくつか探し出し、その企業へ質問項目を考えたうえで面会を行うことを計画した。分析方法は粗さがあるものの、本格的な研究につながる可能性を含んだ探究活動が出来ていたのではないかとと思われる。

#### 4. 今後の課題

以上が、おおまかな事前学習の様相であるが、実施後に下記のような課題が見えてきた。①事前学習期間が短かった印象：地域経済の理解には、政治や歴史、産業などの応用的な知識が必要で、RESASの使い方を学ぶことも併せると、3ヶ月の事前学習では足りない。②地域経済を理解することと学部のカリキュラムとの整合性をどうするか：アクティブ・ラーニングの要素のうち、「主体的な学び」と「対話的な学び」はある程度、実現できそうだが、「深い学び」には、その他の授業の学びとの連動が必要。③データを扱うことと専門性の関係：専門知識をそれほど必要としない人口グループと観光グループは比較的円滑にデータ分析を開始したが、製造業グループと農業グループはやや苦戦。

2021年度の実習は、新型コロナウイルス感染症の感染者数が急増した時期と重なったため、中止せざるを得なかった。実習を実施できていれば、成果や課題がより明確になったと思われる。2022年度も同様の実習を実施予定であり、上記の課題を念頭に置きつつ、取り組みを進めていく。